

はじめに — 精神科で学ぶべきこと

2014年1月現在の医師卒後臨床研修制度では、精神科は7つの選択必修科目の1つになっている。この意味は非常に大きい。精神医学の研修を受けることは、研修医が将来どの診療科に進むとしても、臨床に欠くことのできない知識と経験を提供し、また全人的医療を進めるためにも大きな意味をもっている。それは、次のような理由による。

〈研修医を含むすべての医師が精神医学を学ぶことが重要である6つの理由〉

- ① 精神障害の頻度は高く、精神障害の患者が主に身体症状を訴えて精神科以外の診療科を受診する機会は非常に多い。特にプライマリケアでは受診者の約1割から4割が何らかの精神障害であることが知られている。このときにとりわけ多い精神障害は、アルコール乱用・依存、不安障害、うつ病性障害、身体表現性障害、睡眠障害などであるが、このような患者について、必要に応じて精神科と協力しながら、適切な診療を行うことはすべての臨床医の重要な役割の1つである。
- ② 身体疾患の患者には頻繁に精神症状が生じる。これは、身体疾患によって脳の機能が障害されて生じる症状と、身体疾患に対する心理的反応として起こる症状に大別される。このような精神症状を適切に把握して対応することは、全人的医療の重要な一部分となる。
- ③ 身体疾患そのものの発症や経過などに、心理的、社会的因子が大きな影響を与えている場合がある。いわゆる心身症であるが、この病態を理解し、関係する問題を適切に把握して対応することは、このような身体疾患の治療において重要な意味をもっている。
- ④ 精神科面接技法と精神療法、特に支持的精神療法の基本を身につけることは、望ましい患者 — 医師関係の形成、医療面接のより深い理解と実行のために非常に有用である。
- ⑤ 医師という仕事はストレスの強い仕事であり、心身の健康を保つことは容易ではない。精神医学をより深く学び、研修することは、医師自身のメンタルヘルスケアのためにも大きな意味をもっている。

⑥ 医療者のなかには精神障害に対して根拠に乏しい恐怖心や嫌悪感をもつ人がいる。精神医学をより深く学び、研修することによって、このような先入観をもたずに診療に当たることができるようになることも重要である。

従来の精神医学の教育と研修は、このような精神医学の広い範囲の役割を十分に意識して行われてきたとはいいがたい。2005年発行の、本書の初版『すべての診療科で役立つ 精神科必修ハンドブック』では、通常精神科教科書とは異なり、主に精神科以外の診療科に進む研修医や非専門医を対象に、精神医学に関連する広い範囲の問題とその具体的な対応についてまとめた。その後の研修制度の変更なども踏まえ、現状に即した形に内容の見直しを行い、改訂を行う運びとなった。

1章では精神科医療の基本となる考え方や方法が記載される。2章では日常臨床で出会うことの多い患者の訴えを取り上げ、症状の理解や鑑別診断について解説している。3章では主な精神障害の病態や治療について解説し、精神科への紹介にもふれている。また、4～6章では、リエゾン精神医学や緩和ケア、救急医療などのさまざまな場面ごとに、そこでみられる心理的、精神医学的な問題を取りあげている。さらに、医療者のメンタルヘルスケアについても取りあげた。そのほかに、専門医から初学者へ向けた「プラスワンポイント」を各項目に加えるなど、読者が理解しやすい内容になるよう工夫した。巻末には問題集を掲載したので、知識の整理に活用していただきたい。

執筆者はいずれも実際に研修医を指導している精神科医であり、各分野の専門家である。本書が、読者の精神科研修に役立つこと、さらにその後の臨床にも役立つことを願っている。

2014年1月

堀川 直史
吉野 相英
野村総一郎